

第17部会

ーバル化した世界において新たな連帯を生み出す可能性を秘めたものである。そしてこのようなベックの宗教論は、「宗教間の寛容はいかにして可能か」という問いに対する回答の試みでもある。このベックの議論を特にその国家論に注目しながら考察する。

ベックの主張の骨子はこうである。グローバル化社会の条件によつて国民国家という枠組みが相対化され、その枠組みのなかで構築されてきた制度や組織の一つである「宗教」も変容している。その変容は、むしろ国家によつてゆがめられていた宗教本来の可能性を解放し、国家を越えた新たな連帯の可能性を開くということでもある。

ベックの世俗化論の特徴をまとめると次のようになるだろう。

- (1) 宗教が国家の枠組みから解放されることに積極的な意義を見出す。
- (2) 世俗化諸局面を「再帰的近代化」の枠組みで統一的に論じる。

- (3) 複合性 (multiplicity) の強調。一方向的、二者択一的な世俗化論の批判。

- (4) 新たな連帯を志向した実践性。

ベックは自分の議論が欧米の文脈に限定されたものであることは認めている。一方で、「アジアの混交宗教は、『自分の神』の補完と修正となる」ということも述べている。いずれにせよ、グローバル化・コスモポリタン化という理論的前提がある以上、ベックの議論の射程に入るのは切り離された一つの社会

や宗教ではなく、世界社会における国家と宗教の関係となる。宗教は本来国民国家の枠組みに収まらない性質のものであるという主張は、欧米の文脈に限ることではない。ベックの議論は極めて楽観的ではあるが、宗教に積極的な現代的意義を見出し、その将来的なヴィジョンを具体的に提示するものとして、評価することができよう。

宗教と博覧の近代史

——社会貢献の視点から——

濱田 陽

博覧会を、地域、国、世界の文化や文明の発展をめざして企画された文化装置とすれば、宗教がそこにいかに関わってきたのかをみることで、社会貢献の新たな可能性を考察できるのではないだろうか。日本の宗教と博覧の近代史を振り返ってみよう。

日本初の博覧会といわれる京都博覧会（一八七二）は西本願寺大書院で開かれている。第一回内国勸業博覧会（一八七七）までの三〇博覧会のうち一四が寺院と神社で開催された。近代的公園整備の前に、宗教は博覧会に場を提供したのである。また、明治政府が公式参加した欧米の万国博では鎌倉大仏や平等院鳳凰堂などが再現され、イメージ戦略として日本の宗教文化を押し出している。

昭和には、伊勢で四つの博覧会が開催された。いずれも伊勢神宮と博覧会を一体としてとらえながら人々のにぎわいをつくり出し、伊勢の発展に結びつけようとした試みである。とくに、平和博覧会（一九四八）は、第二次世界大戦後、国内初の博覧会として、日本と伊勢の復興、荒廃した神宮の保護をめざした点で注目できる。

戦後には、長野でも平和博覧会（一九四九）が開催された。長野と日本の産業振興を図るとともに、宗教館を特設して地域の宗教文化の豊かさをアピールした。合わせて、戦争の混乱で中断されていた善光寺開帳を実施、国内外の戦没者の供養も行われた。

金沢の全日本宗教平和博覧会（一九五〇）は、宗教を正面からテーマに打ち出したユニークな試みである。平和建設に宗教が貢献することを唱え、多くの神社仏閣を有する北陸地域の文化と産業の振興をめざした。文部大臣、建設大臣、運輸大臣、衆参国會議員、仏教各宗各派管長、神社本庁統理、基督教団総会議長、聖公会総主教、大本教・天理教幹部などが顧問に名をつらね、政府と宗教界の幅広い賛同を得たことがわかる。宗教平和館を中心に、三つの仏教館、神道館、キリスト館、大本愛善館が設置された。博覧会の宿命として一過性のイベントではあるが、宗派の違いを超えて万国戦没者の慰霊を行い、芸術、産業、観光、科学と宗教の深い関係を示し、地域の活性化を試みた点は評価されてよい。

大阪万博（一九七〇）に設けられたキリスト教館は、科学文明の産物にあふれる万博の相対化をねらった。参加の可否をめ

ぐって日本のプロテスタント教会に深刻な亀裂を生じさせたが、科学・物質・富・喧噪・観覧に対し、それぞれ宗教・精神・清貧・静寂・内省を強調、キリスト教への日本人の無関心を克服し、大戦後に欧米の万博でキリスト教館が設けられたエキュメニズムの流れを引き継ごうとした試みでもあった。

平成の南紀熊野体験博（一九九九）は、現代文明で充足されない心の隙間を聖地の魅力によって満たすことをめざし、「癒し」を流行語として広めた。オープンエリア方式を採用し、聖地熊野の自然環境、巡礼、祭りの無形文化が活用された。イベントの広域連続展開を進め、一〇万人の熊野詣などの巡礼によって熊野古道を再生し、様々な祭りを活性化、世界文化遺産登録まで実現させた。

宗教と博覧会が、行き過ぎたナショナリズムと帝国主義に利用され、また加担してきた事実は否定できない。しかし、地方博に着目すれば、①人々が集う場の提供、②文化力のアピール、③平和発展祈願、④文明への反省的視座の導入、⑤人々の精神の充足に、宗教が役立ってきたことも無視できない。

このような役割を宗教に可能にしたのは、地域社会の文化センターとして観光や産業に関わってきた寺院と神社の伝統と革新性であり、キリスト教と新宗教については、現代文明を相対化する精神的資源である、といえるだろう。